

命のお米バトンタッチ

呉市立横路中学校

三年

藤川

巧汰

僕の家は、代々続く農家だ。といっても今は、家族の分と知り合いに分ける分ぐらいしか作っていない。しかし、それでも祖父母だけでは大変だ。だから、僕は幼い頃から田舎の実家に毎週行き、手伝っている。特に、田植えや稲刈りの時期は家族中大忙しだ。そして、お米や旬の野菜、果物をもらっている。そのおかげで、僕はとても元気に育っている。

平成二十九年十二月十八日、この日は生徒会役員選挙の結果が発表される日だった。朝の妙な胸さわぎはそのせいだと思っていた。その日の国語の時間、僕は担任の先生に廊下に呼ばれた。僕は、何かいけないことをしたのかと思いい、焦って自分の行動を振り返った。おじいちゃんがお亡くなりになりました。その瞬間、考えついたことが吹き飛んだ。すごくシンプルなのに、僕は先生の言葉が理解できなかつた。僕は静かにパニックになった。

話によると、いつものように祖母と二人でドラマを観た後、祖母が朝食を作っている間に急性心筋梗塞で亡くなっただけ。不運にもその前の週は、用事があり行けていなかった。だから、祖父への修学旅行のお土産も渡せられなかった。朝、急に亡くなったから、僕が生徒会長になったことも、感謝の言葉さえも、言えなかった。とても身近な人を失ったことのない悲しみと驚きに耐えられなかった。

こんなに急に亡くなってしまった祖父だが、僕達に残してくれたものがある。たくさんある中で、一番大きいのはお米だと思う。お米は祖父が主に作っていた。お通夜やお葬式などで集まった人々にふるまわれるおにぎりは、祖父が種から一生懸命育てたお米。とても明るかった祖母が半世紀一緒に暮らしてきた人を失ったショックで暗くなった時、そんな時でも食べるごはんは祖父が毎日丁寧に愛をこめて作ったお米だ。そこで、僕は思った。

「亡くなつた人が作つた命が、他の命を支えて
いる。」

心の中で支えてくれるだけでなく、体まで支
えてくれる。亡くなつた人が他の命を支えて
いるところが目に見えるなんですごくいいことだ。
こう思うようになった。僕は少し元気になつ
たよふな気がした。

それから数ヶ月が過ぎた。祖母は、知り合
いの方々が話しに来て下さつたり、猫を飼ひ
始めたりしたおかげで、少しずつ元氣を取り

戻している。祖父のことで大変だつた両親も
落ち着いてきた。高校三年生の兄と中学三年
生の僕もそれぞれ頑張っている。お米の方は、
今は父が育てている。今までの祖父との会話
を思い出したり、祖父が毎日つけていた農業
日記や、本などを読んだり、近所の方のお話
を聞いたたりし、日々勉強している。しかし、
父には会社の仕事があるため、農業ができる
時間と体力には限りがある。その中でも父は
祖父の米を受け継ごうと全力を尽くしている。

こんな時にもかかわらず、西日本豪雨災害
 によりホースが流され、田んぼの水が枯れた
 り、一部の稲が土砂の下敷になつたりと大変
 なことが起こつた。しかし、家族で協力した
 こゝにより被害を最小限にすることができた。
 その後、稲に穂がついた。ついに、父の努力
 が実になつたのだ。この時は家族中で喜んだ。
 これらのことから、僕にとってお米とは、
 家族を繋ぐものだと思ふ。何十年も前から、
 先祖代々受け継がれてきて、今は祖父から父
 へ、そしてまた次の世代へと。そのお米に、
 悪いことがあつたら家族みんなで心配し、良
 いことがあつたら家族みんなで喜ぶ。こうし
 て家族はお米によつて強く結ばれている。だ
 から、僕は今からしつかりと父を手伝ひ、い
 つかは僕が受け継いでいけられるようにした
 い。そして祖父のように、他の命を支えられ
 る、おいしいお米を作りたい。

終